

BATTLE BALLER

HARUKA

I - 5

鍵

(前編)

Ψ

バトルボーラーはるか

第一集

バトルボール(神気珠玉)

第5章

鍵

(前編)

作・Ψ (Eternity Flame)

英 樹(はなぶさ いつき)

「はるか、あの女の子かなり強いぞ。まだ腕が痺(しび)れてる。」

「銀の翼に銀の太刀(たち)。...あなたが龍姫(りゅうき)の血の継承者(けいしょうしゃ)ね。」

「ああ。俺って、結構有名なんだね。」

「お姉さんは見つかったかしら？」

「何故それを!？」

「フフフ...」

天の邪鬼(あまのじゃく)で何を考えてるのか読めない正友(まさとも)が、珍しく取り乱している

「...まあいいや。アンタ強いから、悪いけど二人がかりでとっちめるからな。」

「それで私に勝てると思ってるの？」

「フツ、余裕ぶっちゃって...いくらあんたが強いと言っても、俺達二人にかかっちゃお終めえよ。な、はるか！」

「そうよ!!」

「じゃあ、例えば私がこの弓矢を、こちらに向けて打ったらどうなるかしら？」

そう言って弓を引くと、放つ瞬間にリンシヤンの照準が秀樹(ひでき)に向かった一ツ!!

「しまった!？」

正友は全速力で秀樹の元へ。身を挺(てい)して弓矢から秀樹を庇(かば)った一ツ!!

ドーン...

「ぐああああー...!!」

「アハハハハッ。これで元どおりね。」

戦闘不能となった正友。雷の余波が消える事なく、彼の体を駆け巡っているツ。あまりにも凄惨(せいさん)な光景に茫然(ぼうぜん)とするはるか。そんな事は気にも止めず、リンシヤンは語りかける。

「秘宝の在処を本当に知らないのか、それとも隠してるのか知らないけど。そろそろ限界みたいだから、拘束(こうそく)させてもらうわよ。」

そう言ってヴァジュラを出したリンシャン。輪刀(りんとう)がフラフープのように大きな輪となると、はるかかをすっぽりと包み、縄りあげたッ。

「くっ、うあっ...」

「フフフ。これで宝は間もなく私のもの...」

もう一つヴァジュラを出すとロープのようになり、はるかかを拘束している輪に向け投げると結合し、まるで大きな手錠のようにして自分の元へ引き寄せたッ。

「きゃっ!？」

「フフフ。」

「そこまでじゃ!!」

「何者ッ!？」

「スペシャルアクアビーム(特選水圧砲)!!」

捕われのはるかかを、どこからともなく現れた水しぶきが解放したッ。戦意を喪失し、気を失いかけ落下してくるはるかかを、一人の老人が抱きかかえた一ツ。

「その娘を渡せッ!!」

「まあ、待ちなされ。」

「...師匠!？」

はるかかを助けたのは鮎吉(でんきち)だったッ。くじけそうになり、意識を失いかけていたはるかかが再び元気を取り戻した。

「フオフオフオ...はるか。どんな困難な時でも、心が折れてはイカんのお。」

「早くその娘を渡せッ。さもないと、年寄りだからと言って容赦しないわよッ。」

「お主の目当てはソロモン王の秘宝じゃろ？」

「そうよ。それがどうかして？」

「確かにこの子は、その宝を解放する鍵を握っておる。じゃが、まだその鍵を手にしておらぬのじゃ。」

「どういう事なの？」

「フオフオフオ。お主も聖書の話は知っておろう。」

「ええ。それで？」

「そこにはこう書かれておる。楽園への扉には、天使と回る炎の剣とが立ちはだかっていると。天使とは、人の事だと言うのは分かるじゃろ？」

「ええ。なら、後の回る炎の剣とは何なの？」

「“光あれっ”と言う神の言葉に始まった天地創造。言葉が光となり、炎となり、やがて人となった。物質が人を生み出したのじゃが。それを更に紐解(ひもと)けば、炎が原子を生み、原子が分子を生み、そして物質へ...やがて生物といった具合になったのじゃよ。」

「そんな事は分かってるわ。時間かせぎをしてるつもり？早く結論を言いなさい。」

「まあ、慌てなざるな。原子も分子も丸い。これら全ての流れを単的に言えば、言葉が炎となり炎が原子、分子、物質となった。お主らの使う心拳も、それと同じ原理を用いておる。そうじゃろ？」

「なら“回る”とは？」

「原子や分子・物質の作用の事を言っておるのじゃ。」

「なるほど...あらゆる外力を受け流し、内には全ての力を結びつけようとする遠心力など。これら一連の動きを例えた物だった。そう言う事かしら？」

「その通りじゃ。回るとは球体の運動法則を一言で言い現した物。では、“回る炎の剣”とは何じゃ？」

「その娘が自らの言葉で生み出した物...かしら？」

「そうじゃ。」

「...なら話は早いじゃない。早くその娘に出させなさい！」

「まだ分かっておらんようじゃのお。」

「何ですって！！」

「そうじゃろ？言葉だけで片付くと言うのなら、神は言葉だけで宇宙を創造したという事になる。ならば、同じ方法で使っている、お主のインドラ心拳は言葉だけで生み出せるのかな？」

」

「なるほど...内力(メキド)の事を言ってるのね。」

「そうじゃ。今のこの娘の力では、まだ回る炎の剣を造り出せないのじゃ。じゃから、それが出来た時に腕づくで奪うがよかろう。」

「いいわ。なら、そこに倒れてる二人の命が尽きるまでに、その剣を生み出せるようになさいね。」

そう言うと、リンシャンは姿を消した。

「待って！！」

「もう、あ奴は去った。追っても無駄じゃ。」

「お兄ちゃん達が...わたし、どうすればいいの？」

「あ奴を打ち負かせば毒は消える。正友から聞かなかったかのお？」

「いいえ、でも...あの人に勝てる気がしない...」

「心配するでない。炎の力は無限じゃ。」

「...炎の力？」

「そうじゃ。」

「一つ質問していい？」

「なんじゃ？」

「さっき話した聖書の事なんだけど...」

「うむ。」

「なんで今まで私に話してくれなかったの？」

「頭でっかちな人間になって欲しくなかったからじゃ。」

「どういう意味？」

「お前には分からんじゃろうが、さっき話した内容はとても大事な事なのじゃ。それ故に落とし穴もある。」

「落とし穴？」

「そうじゃ。世間一般に知れ渡っていない事。その上にスピリチュアルな内容であると、何かこう、自分は特別な事を勉強して偉くなったような気分になる。程度の差こそあれな。加えてお主には特別な力もあるしのお。」

「...そうなの。」

「世の中から背を向けず、優しい子になっておくれ。普通の女の子として、誰からも愛されるいい子にな。」

「うん。」

落ち込んでいたはるかだが、少し元気がでたようだった。

「さあ、明日からは修業じゃ。」

「はい。」

「お兄ちゃん、行ってくるね。」

沙織(さおり)と正友に別れを告げ、最後に秀樹の元を訪れたはるか。鮎吉が言うには修業は山籠(やまごも)りらしく、しばらく会えない秀樹達の事が気がかりではあった。

「はるか。」

「お兄ちゃん！！」

「沙織ちゃんと正友は無事か？」

「うん、ぐっすり眠ってるわ。」

「...そうか。不意を突かれて不覚(ふかく)をとったが、俺の方はもうすぐ回復すると思う。沙織ちゃん達の事は心配するな。」

「うん、行ってくるね。」

「ああ。頑張ってるな...」

気を引き締めて向かった鮎吉宅。

「来たか、はるか。早速、修業を始めようかのお。」

「えっ！？山籠りするんじゃ...」

「そうじゃが、その山とは儂が持っておる。」

「えっ????」

「天地創造の炎。儂らの間では“原子の炎”と呼んでおるが、その原子の炎のエネルギーは、人間にも宿っておる。それが何かは知っておるな？」

「熱でしょ。」

「そうじゃ。物質に宿る炎、それらの機能の根本とは熱。地球の中にもマントルなるマグマの熱があるように、人の中にも血液が流れて駆け巡り燃える事によって力を与えておる。」

「うん。」

「それらを分析して比較するとじゃな。地球も人間も、同じような生体機能を持っておる。だが、エネルギーの大きさが違うのは何故かな？」

「地球は大きいから、気の大きさも違うからじゃないかな。」

「まあそういう事じゃが。炎を集めて生み出す、フェニックス心拳とは何じゃ？」

「宇宙の創造と同じ仕組みで作り出す力。」

「なら外気功とは？」

「地球や宇宙全体の出すエネルギー。」

「うむ。なら内気功は？」

「自分が作るエネルギー。」

「そうじゃ。それらは同じ性質の物なので、連結する事が出来るのじゃ。この意味が分かるかな？」

「えっ！？どういう事？」

「まだ分からぬかのお。地球を流れる炎も人に通う炎も同じ。言わば、別々に流れる川のような物。心拳とはそれらを結びつける作用をなしているのじゃ。」

「そういう事なんだ。」

「その“流れ”を自在に操る力が内力じゃ。大きな船を操縦するには舵(かじ)にも力が要るように、大きな外力を得るにはそれ相応のメキド(内力)が欠かせぬのじゃ。ここまでは分かったかのお？」

「うん。」

「内力(メキド)はこの地球の...いやっ、宇宙に流れる力をも自由に操る事ができる。物を破壊したりもすればその逆も然(しか)りじゃ。ならばこの宇宙を己自身に所有する事も出来るとは思わんかのお？」

「えっ？」

「今からお前は、儂自身が作り出した山の中で修業をするのじゃ。」

鮎吉の眉山のような眉毛が光り出したッ。

「はるか。今からお前を儂の体の中へ取り込む。よいな。」

「はい。」

はるかが鮎吉の眉毛に吸い込まれた。

「ここが師匠の中の世界...」

「はるか！聞こえるかのお？」

天から鮎吉の声がした。

「はい、師匠。」

「今お主は、儂の作った異空間の眉山におる。登山道より回って上を目指しなさい。ここには人がおらぬから、好きなだけ暴れてもよいぞ。」

「はい。」

建物はああるが、車の排気音や人通りのない登山道。流れる雲や鳥声はあるのに、人の気配が無くなると自然はこうも静かな物なのかと、不思議な気持ちを覚えながら、忌部神社(いんべじんじや)の裏通りへと差し掛かった時—

「君がはるかちゃんだね。」

「あなたは？」

「僕は洋一(よういち)。君の修業のお手伝いを鮎吉老師から頼まれてる。」

「そうなんですか。」

「ああ。早速だけど内力修業の第一歩から始めよう。」

「時間がないんで...お願いします。」

「まず第一に、内力を高めるには集中力が肝心だから、その修業から始めるから。僕の真似してみてください。」

洋一が座禅(ざぜん)を組んだので、はるかも同じようにして向きあつた。瞼(まぶた)ごしにも洋一の姿がオーラの流れで確認できる。闇に浮かぶそのシルエットから声が聞こえてきた。

「はるかちゃん。」

「えっ！？は、はい。」

「今、僕は君の心に話しかけている。僕のオーラが分かるかい。」

「気の通う径(みち)を気道と言ひ、その流れを切り換える弁(べん)の役目を果たす所を点穴(てんけつ)と言う。それら一連の流れが分かるかい。」

「はい。」

よく見ると、体中を走る血管を流れているオーラ。心臓とリンパ等が、その中でも点となるほど大きく色が滞留(たいりゅう)している。はるかがその事を言うと、そこが気を切り換える場所だと洋一が答えた。

「この点穴は大小含め数百箇所あり、そこを閉じられると気道が溜る。君らの間では“炎” “メキド” “内力” などと呼ばれてる、気の流れの仕組みは分かってもらえたかな？」

「はい。」

「気の流れ。それを炎と呼ぶのは血流を司(つかさど)る訳だからだけど、なら内力を上げるとは、どういう事かわかるかな？」

「いえ、分かりません。」

「炎が激しく燃えてるのを、イメージするとどうかな？」

「あっ！？熱量...かな？」

「そう。血流に沿う気道に集約された熱を圧縮させる。選ばれた者だけが扱える能力だ。」
座禅(ざぜん)を組んでいた洋一が立ち上がろうとしたので、はるかも立ちろうとすると、そのままのように言われ、台車に乗った機械らしき物が置かれた。

「それは何ですか？」

「これは僕が発明した内力測定器(ないりよくそくていき)さ。全力で炎を爆発させてごらん。」
座禅の状態からはるかが炎を錬(ね)ってみると。目盛がどんどん上がっていく。

「5万b b f かあ。」

「それは何の単位ですか？」

「熱量と勢い等を、計測して変換する内力値の単位だよ。[戦投力]と僕らは呼んでる。」

「それってどの程度の物なんでしょうか？」

「正友が8万くらいだったかな。」

「洋一さん、正友を知ってるんですか？」

「ああ、親友だよ。」

「じゃあ、お兄ちゃんも？」

「秀さんの事かな。」

「ええ...」

はるかの知らない秀樹の一面。思いつめたように言葉を失ったのは、一体、何なのだろうか。自分ではまだ気付けないはるかであったが、その瞬間—

「はるかちゃん。凄いね！」

「えっ...どうかしましたか？」

「今一瞬、戦投力が10万を越えたよ。」

「えっ！？何でだろう？」

「うーん...分からん。今のがずっと続くんなら、僕のレッスンも必要ないんだろうけど。」

「そうですね。安定できるように頑張ります。」

「まあ気長にやってみよう。」

そう言うと、洋一はまたはるかと同じ向き合って座禅を組んだ。どれ程時間が経っただろうか。冥想(めいそう)に更ける、はるかの心に乱れが生じた。

「どうしたんだい？はるかちゃん。」

「息が苦しくて...」

「...今、何か迷いが生じたよね？」

「はい...正友達の事、知ってますか？」

「ああ知ってる。」

「なんか皆の命が危ないのに、早くメキド(内力)を上げれないかと焦(あせ)ったら、苦しくなってきて...」

「少し休んだ方がいいね。」

はるかの点穴(てんけつ)を突き、洋一は血道の流れを緩(ゆる)めた。

「おそらく集中してたから分からないだけで、精神力と体力の限界に近かったから、そうなったんだと思うよ。さらに不安と焦りも加わり、力をコントロール出来なくなった。」

「...。」

「集中して常人にあり得ないほど、膨大(ぼうだい)になったメキド(内力)を制御するのが精神力だ。この両方のバランスが取れてこそ、初めて強力な力が使えるようになる。焦りや不安は乗り越えなきゃ駄目だよ。」

「...どうすれば乗り越えられるんでしょうか？」

「忍耐力(にんたいりよく)じゃないだろうか？」

「忍耐力？」

「そう。色々、抱えてる問題はあるだろうけど、それを耐(た)え忍(しの)ぶこと。暴走するメキド(内力)を操るには、そうしないとイケないんじゃないかな。」

「うーん。何となくだけど分かる気がします。でも時間が...」

「だったら焦らずに必死になって、少しでも早く修業を終えるように頑張れば？」

「それは...そうですね。」

「老師の作られたこの異空間は、普通の世界よりも時間の密度が濃く早くできてる。この世界の十日が地上での一日分くらいかな。」

「本当に!？」

「ああ。それで老師は君をここへ送ったんだ。だから頑張って。」

「はい。」

再び元気を取り戻したはるか。それから数日が経過した。

「はるかちゃん。やっとコツを掴(つか)めたみたいだね。」

「はい。お世話になりました。」

「おっと、まだお礼を言うのは早いよ。」

「と、言うのはどういう事ですか？」

「メキド(内力)については説明したので、今度は実践編だ。」

「実践...!？」

「そう、内功と外功の作用によりメテオカリバーは作られる。内功は自分の力、じゃあ外功とは何かな？」

「内功の反対ですよね？」

「そうだね。舵(かじ)となる自分の力に比例する外部からの力だよ。内功と外功を練り合わせて作る神の武器。それらを駆使(くし)する使い手達を、バトルボーラー【戦投士】という。その言葉からも分かるように、力の最終形態は、神の根源的かつ普遍的力の結晶体であるバトルボール【神気珠玉】だ。しかし、そのボールに至るまでの過程には、小さなボールを段階的に大きくしていく必要がある。それは何かな？」

「小さなボールを、細胞のように繋ぎあわせて作り出す武器ですね。」

「そう。ボールというのが大きな球体であるのに対し、まだ未熟で非力なサイズの球体は、まるで原子や分子を結びつけるかのように作用させる事により、別形状の直接・間接武器とさせる必要がある。君の内功が上がったという事。それは逆に考えると、車ならギアが増したという事だ。それはつまり、ボールを発動するまでに新しい武器を作らなければ、戦闘時により強い攻撃を続けられない事を示唆(しさ)している。ま、相手が自分以上でないなら、その必要もないんだけどね。」

「そういう事なんですか。...ひょっとして、それが“回る炎の剣”!？」

「そうだよ。神代(かみよ)から受け継がれし、バトルボーラー【戦投士】達のスピリットアームズ【神統武具】。火炎(かえん)を司(つかさど)る君へと、先達から伝わる古(いにしえ)の神統武具。火聖剣メテオカリバーだ。」

「メテオカリバー!？」

「その聖剣を手に入れる為には、それに見合う力量を、君自身が備えなければならない。心・技・体。この三要素の内の、まだ第一段階を終了しただけなんだ。」

「...そうなんですか。それで残りの修業は?」

「剣技と組手の修業だよ。」

洋一はそう言いながら、忌部神社(いんべじんじゃ)の裏参道を指さした。

「この参道には、四国霊場ミニ八十八ヶ所が設置されている。その一つ一つの祠(ほこら)には、“魔物”が封印されていて、そいつらを倒していく事。そうすれば自(おの)ずと道は開けるから。」

「分かりました。じゃあ、行ってきます。」

「まだまだ。ハヤる気持ちは分かるけど、君はまだ剣技を会得(えとく)してないよ。」

「剣技で魔物と戦うんですか?」

「そうだよ。内功で炎を練って刀を作ってみて。」

「こうですか?」

「ここからは剣技に入るから、別のコーチを紹介するね。」

「もう来られてるんですか?」

「ここにいるよ。」

「えっ!？」

はるかが振りむくと、漢(おとこ)の姿があった。

「あなたがコーチですか!？いつの間に私の後ろに...？」

「さっきからいたよ。剣技がどうかいうところから...俺の名は功一(こういち)、よろしくな!」

「はい。よろしく申し上げます。」

インテリっぽい感じの洋一とは対極的に、短髪でスポーツマンタイプの容姿の功一。彼は懐(ふところ)からは古びた本を取り出した。

「これがフェニックス心拳(不死鳥心拳)の剣技書ですか？」

「そう。人中極咲疏心剣法(じんちゅうきょくしょうそしんけんぼう)というんだ。」

「人中極咲疏心剣法！？」

「この剣技は人を中心に据(す)えた円運動になっている。上段・下段をそれぞれ[天]・[地]と分け、剛(ごう)と柔(じゅう)に緩急(かんきゅう)の動きがあり、それらを不死鳥の翼とツメに見立てた物だ。上段を[炎帝翼(えんていよく)]、下段を[地熱爪(ちねつそう)]という。ここまでは分かるかい？」

「はい。」

「地熱爪には、荒々しい剛拳としなやかな柔拳、素早い動きの陽拳と逆の陰拳があり、その一つ一つに、十一の基礎の型がある。[回]・[波]・[八方位]・[遡(さく)]だ。回とは円運動の回転運動。それが線運動すれば波うち、その二つの動きが上下前後左右斜めに運行する。」

「遡は？」

「遡とは、それらの軌道(きどう)をさかのぼるという意味だよ。」

「要は円運動を全方位に展開するという事ですね。」

「そうだよ。自分を中心の軸としてね。円運動が立体となると球体になる。球体は全ての力を受け流し、自らの動きを滑(なめ)らかにもし、速さや力を増長させてもいく理想的な動きなんだ。」

「つまりはとめどなく流れ続ける剣撃(けんげき)という感じですか？」

「そうそう。さすがに呑みこみが早いね。流れ続ける流星の剣技。光は熱を宿す。だからこそ“メテオカリバー”というんだ。」

「そういう事なんですね。」

「炎帝翼の剛柔陽陰に中(あた)る動きには翔・降・風・烈とあり、十一の基本は同じだ。中段には、天・地それぞれの下段と上段の動きが相当する。これらを自在に組み合わせて、隙(すき)のない攻撃を作るのが理想だよ。」

「はい。」

「剣技書にはこう最後に書いてある。」

神鳥四位十法(しんちょうしいじっぽう)に翔(か)け

地熱(ちねつ)四方(よも)十哲(じってつ)を巡る

炎翼翔け降りて風を裂き

十進の法哲(ほうてつ)転(てん)じて球となり

遡上(そじょう)して対をなす

炎玉(えんぎよく)の流れ頂きに達すれば

いよよ太極人中(たいきよくじんちゅう)に咲く

「うーん。分かんない...」

「前の六行は今までの説明だよ。後ろの2行の[人に太極が咲く]とあるのは、即(すなわ)ち天地の攻撃の中間に人がいるということ。天と地の間を取り持つのが人であって、人が円運動して超高熱が昇華(しょうか)する事により太極が現れる事から、[花が開く]と掛けて、[太極が人の中に咲く]というんだ。」

「だから人中極咲疏心剣法(じんちゅうきよくしょうそしんけんぽう)と言うんですね。」

「その通り。剣技は全て詩(うた)になって、攻撃のリズムを作ってるから、心の中で唱えながら戦うと更にその攻撃力が増す。内功と外功、それに言葉。まさしくそれは、不死鳥心拳と同じ構造をしているんだ。高回転が熱を生み、遠心力でそれを取り込む。生命を育(はぐく)むかのようなサイクルとその動きを完全に会得した時、聖剣は君の手中(しゅちゅう)にあるだろう。」

「はい、頑張ります。」

「じゃあ基本型の動きから始めようか。」

人体に則(そく)し、かつ力学にも適(かな)った動きは、頭に浸透(しんとう)しやすかったが、実行するとなると時間を要し、必死に頑張ったはるかだが会得するまでに十日を要した。

「ヤバいね...はるかちゃん。」

「えっ！？何がヤバいんですか？」

「いやっ、凄いねって事さ。よくこの短期間で修得できたね。」

「いえ、功一さんのお陰です。」

「よく頑張ったな、はるか。」

「お兄ちゃん！？」

元気そうな秀樹の姿を見て、はるかの声のトーンが上がった。

「お兄ちゃん、体はもう大丈夫なの？」

「ああ。傷が浅かったから何とか自力で治せた。心配をかけたな。」

「ううん、良かった...」

「おいおい、泣かないでくれよ。」

秀樹は妙に不器用で鈍感(どんかん)な所があり、涙目になったはるかに困惑(こんわく)してしまい、気の利いた言葉が言えない。相当な重圧をはるかは受けていて、その切実さが急激な飛躍(ひやく)にも繋がっていたのが、体も心も疲労しきっていて、ホツとした瞬間にそれが涙となって自然に溢(あふ)れていた。

それがどういう意味をなしているのか、はるか自身も分かっていないのだが...第三者の功一が、その状況とやりとりを見ていれば、そういう感情の流れがどういう事なのかは明白で、ついボソッと口癖が出てしまった。

「ヤバいッすよ。」

「何がヤバいんだい？功ちゃん。」

「いえっ、あっ、先輩お久しぶりです。ご挨拶が遅れて申し訳ありません。」

「いいよ、そんな堅苦(かたくる)しい挨拶は。それよりはるかは疲れてるみたいだから、休ませた方がいいね。体術の実践は明日からにしよう。」

「はい。了解しました。」

「だから堅くなるなって...あっ！？それよりはるか。せっかくの可愛い顔が台無しじゃないか...さあこれで涙を拭いて！」

「うん、ありがと。」

抱擁(ほうよう)でもしてあげたなら、不安や気負(きお)いも一気に解(ほぐ)れるだろうにと功一は内心想ったが、秀樹にはそれができ得る精一杯の励(はげ)ましであった。はるかにもそんな秀樹の性格を知っているのだから、彼なりのぶっきらぼうでも暖かな思いやりに笑顔で応えている。その光景が功一には切なかった。

—三日後—

「...お兄ちゃん!?!...」

「おはよう、はるか。」

「私...スゴく眠っちゃった気がする...」

「かれこれ三日三晩になるかな。」

「えっ!? そんなに...」

「疲れきってたんだろな、きっと。さあ魔物退治と行こうか。」

「お兄ちゃんも付いてきてくれるの?」

「ああ、手は借してやれないけど。俺がアドバイスするから。」

「そう...」

そんな話をしながら歩いている内に、二人は裏参道に辿り着いた。

「今から封印を解く。いいな!!」

「うん。」

裏参道入口の鳥居(とりい)に、秀樹はそっと手を触れ呪文のような物を唱えた。

「深淵(しんえん)なる海溝(かいこう)の獄(ごく)に繋がれし魔獣達よ。今、再び蘇(よみがえ)りここに集え。海竜牢封印解除(かいりゅうろうふういんかいじょ)!!」

鳥居の奥が暗黒に染まった。

「この先には、師匠達が代々封印してきた異形の者達がいる。気を抜くな!」

「はい!!」

「行けッ!」

そんなに広くなかった筈の参道が、広大な闇の世界となっていた。

「炎を解放しろ。」

「分かったわ、お兄ちゃん。」

はるかがメキドを集中すると、それに呼応(こおう)するかのようにはる部神社(いんべじんじゃ)へと赤い光が筋立って、暗闇に活路を見い出せた。

「ウウウウウ...」

悶(もだ)えるような野獣の音が無数にした。

「！？こ、これが異形の者達...」

ある魔物は三ツ目の巨人。またある者は大きなネズミに翼が生えたような姿。またある者は上半身が人で下半身が蛇(へび)であったりと、おぞましい姿の魔者達ばかりであった。

「はるか。この者達は人間ではない。人の持つ炎を憎み、食い尽さんとする輩(やから)だ。手加減するな！」

「分かったわッ。」

両手に燃えたぎる剣を持ち、はるかが八十八匹の魔物に敢然(かんぜん)と立ち向かっていった。屈強(くつきょう)なる魔物達は数に頼る事なく、我先に炎を喰らわんと襲いかかる。

「人中極咲疏心剣法(じんちゅうきょくしょうそしんけんぽう)！！」

広天(こうてん)の郡星(ぐんせい) 光りに炎を宿す

煌星(こうせい)の炎熱(えんねつ) 廻(まわ)りて八方

八方廻り天地行き交えば 八生(はっせい)の道現(あ)るる

八生より万象(ばんしょう)出(い)ずる

万象の山上 高みに灼熱(しゃくねつ)鳥(とり)の影なす

不偏なる根源 不屈なる力

万有(ばんゆう)を制して万有に在り

炎帝地熱不死の理(ことわり) たゆまず流れ

無上の生となり給(たも)う

不死神鳥(ふししんちょう)一度(ひとたび)翔(か)けば

四法に光翼(こうよく)まつわりて

一度地に降り立てば 四海豊土(しかいほうど)を灼(や)き尽す

〱回、小極の鼓動 〱波(は)、小極の流動
小極和合に意気発し 四散連動し其(そ)を拡(ひろ)ぐ
一国の光彩(こうさい)西方(さいほう)に沈めば
西方遠国東天(さいほうえんごくとうてん)に暁(あ)け兆(きざ)す
小極は太極に通じ 太極は小極に通ず
八生は死を呼び 死は八生を招く
中天(ちゅうてん)に人(じん)
覇氣(はき)を備うこと十一計(じゅういっけい)
炎玉(えんぎよく)の恒星東郡(こうせいとうぐん)より翔け
南川(なんせん)を下り征西(せいせい)して北上す
陽陰四位八方に展(ひら)き 逆卷(さかま)けば万象を携(たずさ)え
昇れば森羅竜(しんらりゅう)と化し
発(た)ちいて九天(きゅうてん)へと帰(き)す

抑揚自在縦横無尽(よくようじざいじゅうおうむじん)
時空を巡ること八十八方
天地の神氣(しんき)ここに定まる
天命降りて地脈に通う
合わせて命脈(めいみやく) 共に炎熱
太極よりもたらず

その実相(じっそう)に神鳥(しんちょう) 不死神鳥に双極
一極に光翼(こうよく)の四生 対極に熱爪(ねっそう)の四生

合わせて八生八方位

八生に十一陣

一極を法 法に哲して一極軸なす

合わせて法哲 数えて八十八計

とこしえに世を照らす

億(おく)万世(ばんせい)の創始(そうし)

大河に一滴業火(いつてきごうか)もしかり

本郷(ほんごう)に空(くう)

空に静心(せいしん) 静心に和合(わごう)

一体の基(もと)い 情炎の炎上に在り

情炎は熱情 熱情は不死

不死は不遍 不遍なれば理法

理法に太極 太極は礎(いしずえ)

礎は永遠 永遠は輪廻(りんね)

輪廻は円状

円状胎動(たいどう)して球態炎玉をなす

炎玉の輪廻 十一方陣一生(いっせい)として弧(こ)を描き

八生となり興(お)こること幾星霜(いくせいそう)

天命地脈の今昔(いまむかし)貫く埋法

順じて追えば即ち 空(くう)なる静心和合して
熱情不遍の焰(ほむら)となり
永遠輪廻の情炎 円状に胎動して帯(おび)なし
炎玉星(えんぎよくほし)となりまたたく
天地創生の光

仰ぐ中天人(ちゅうてんじん)に鳩合(きゅうごう)し 本郷へ導く
其(そ)を奉(ほう)じて我も交らん
神鳥四位十法に翔け
地熱四方十哲を巡る
炎翼翔け降りて風を裂き
熱爪の火光(かぎろい)地を滅す
十進の法哲転じて球となり
遡上(そじょう)して対(つい)をなす
炎玉の流れ頂きに達すれば
いよよ太極人中に咲く

まるで鼻唄でも唄うかのように軽快に詠み上げられた詩歌(しいか)。その詩歌に沿って振われた剣技の勢いは凄絶(せいぜつ)を極め、おぞましき魔物達を立ち所に一網打尽(いちもうだじん)に粉碎(ふんさい)した一ツ！！

「出来た。【極導星雲詩(きょくどうせいうんし)】。」

螺旋(らせん)を描きながら着地すると、膝を少し折り曲げた状態で、両脇に刀を交差させた前屈(まえかが)みの姿勢のはるかがそう呟(つぶや)いた。そして前を向くと、灰となった魔物達が風と共に消えて行った。それと共に暗闇も去り、元の景色に戻ると、忌部神社(いんべじんじや)の辺りから筒状の赤い光が雲にまで伸びているのがはっきりと見えた。

「あれは...!？」

「行くぞ、はるか。」

「えっ!?!うん...」

二人が忌部神社に入ると、その光は消滅してしまった。

「お兄ちゃん、今の光は何だったの？」

「“火の柱”さ。」

「火の柱？」

「ああ。その昔、エジプトからカナンを目指したユダヤ人達を導いたという炎。お前の力に反応したんだろうな。」

「力...!？」

「そう力だ。お前の額の印の名は知ってるだろ？」

「ええ。メノラー...だっけ？」

「そうだ。メノラー...それはユダヤ人達の礼拝所に灯されていた燭台(しょくだい)。至聖所と言われる、秘宝が納められた重要な場所にそれはあった。この意味がわかるか？」

「...分かんない。」

「メノラーという宝を照らしていた炎、それと人々を導いた炎の柱。誘導(ゆうどう)する物と照らす物。炎の柱が特殊な物質でできた目印に例えれば、メノラーはその特殊なからくりを解読して、目印を発見する機械の役目をしている、と言う事だ。」

「...そうなの。」

「ジャン・ピエールに襲われた時の、沙織ちゃんの話は聞いているか？」

「いいえ。何があったの？」

「あの時、沙織ちゃんはお前の“名前の由来”を口にした途端。真っ赤な光が星空に昇ったと言ってた。」

「何で...そんな事で炎の柱が？」

「その時は、お前の名前自体が、さっき言ったような特殊な効果を発動させる、きっかけになっていたんだろな。」

「私の名前自体に...どんな意味があるの？」

「【時空を超える愛】と、お前は幼い頃に自分で語っていた。覚えてるか？」

「...時空を超える愛...ええ、覚えてるわ。言われるまで忘れてたけど。」

「極導星雲詩にも書いてあったが。お前も薄々は感じてるんじゃないかと思うんだが...あれは宇宙生成の始まりを説明しながら、その構成の仕組みを説いている。宇宙も光から始まったのだから、夜空に光を放つ星も、同じ構造をして生成されていると述べ、その理を知ってマネたら、自分にも同様の力がもたらされるという内容なんだが。分かっていたか？」

「うん...そこまで具体的に把握できてはなかったけど、大まかには...」

「極導星雲詩風に言えばだな。今、俺達に起こった事と、過去に沙織ちゃんの身に起こった事は同じ。結果が同じなら、原因やプロセスも同じなんじゃないかって答えになる。つまりはお前の名前の持つ意味が、メノラーの印のような、特別な効力を持った意味あいを示唆(しさ)してるんじゃないのか。」

「うーん。そっかあ...」

「これを見ても。」

秀樹はそう言って、忌部神社の拝殿(はいでん)の石碑にはるかを案内した。

「これは...？」

「炎を集中してみろ。」

はるかが石碑に向かって炎を発すると、俳句っぽい表面の草書(そうしよ)の文言(もんごん)が消え、赤く光る異国の言葉らしき物が浮かびあがった。

「何、これ？」

「神山文字だ。」

「神山文字????」

「そうだ。一見、ハングル文字にも見えるが、崩して書くと、アラビア語やヘブライ語に近いと思わんか？」

「うーん...アラビア語とか見た事ないから...分かんない。」

「さっきの話に戻るが“はるか”という名の言葉の意味が解明できていないのは、おそらく色々な言葉の意味が混ざっているからじゃないのかなと思うんだ。神山文字がそうである様に、日本は単一民族というが、大昔は色々な人達が世界からやってきて、オレ達のご先祖様もそうなんじゃないかと。」

「神山文字は消えたんじゃないで、日本語の中に混ざったって事？」

「そうだ。他の言葉と同じように、合わさって日本語になったってワケだな。」

「私の名前は神山文字から来てるの？」

「いやっ、それだけじゃない筈だ。オレは神山文字も読めるし、その語源となったヘブライ語も習ったが、お前の名の意味を見つけ出せなかったからな。」

「お兄ちゃん、この文字読めるの？」

「ああ。どれどれ...ワカニホンチタケヤブヤケタ...だな。」

「どういう意味なのかしら...」

「ん、待てよ...」

考え込む秀樹とはるか達の世界に、郷土史家である私の心が、そこに空気のように溶け込んでいる。確か、お好み焼屋で、はるか達の事について話を聞いていたはずだが...いつしか彼女達の世界が、私の目の前に映画でも見せられているように展開しているのは、一体何なのだろうか？

たまに解説の中身に生の言葉が入るのは、その為であった。夢を見ているかのように朧(おぼろ)げな私の意識も、時折、気になる言葉や激しいシーンに直面すると、はっきりとした感情がこもってしまう。秀樹の読みあげた神山文字の言葉は、私が研究した内容と一致する所があったので、彼が結論を口にする前に、私の意識が先回りして自論を展開していた。

その自論というのは、今回の「ワカニホンチ…」という言葉に関して言うならば、童歌(わらべうた)のような物であるという物。子供達と接していると、よく耳にする童謡や言葉遊びの類には、一見して不可解な内容の物がよくあり、都市伝説や七不思議といった様々な形で、大人達の間では取りだたされている。

童謡の他に、徳島の子供達の間では、よく反対言葉が流行っていて、「タケヤブヤケタ」と「ワカノポンチタケムラタケコ」という反対言葉があった。どちらも、いかにも子供の考えそうな言葉だが、ソロモン王の秘宝が眠ると噂されるこの徳島には、たとえしようもなさそうに見える事であったとしても、決して侮(あなど)ってはならないと思い、研究していく内にある結論へと達していた。

その事について思っていた私の意識を知っているかのように、次の瞬間には、秀樹の言葉が私の結論と、全く同じ意見だったのを見て驚くことになる。

「ん、待てよ…」

「何か分かったの？」

「いや、この言葉と日本語を掛け合わせるとだな。`和が日本地に竹やぶ焼けた、となる。和とは和合の事で、お前の持つ証に反応して、何かの現象が地に起こるという事なんじゃなかろうか。それが証拠に竹やぶが焼けるとあるが、[竹]という漢字を無数に重ね合わせると、どうなる？」

「えっ!？」

「何かのマークに似てないか？」

「あっ!!メノラー??？」

「そうだ。そして一番初めと最後の言葉をつなげると、[焼けた輪]という言葉にもなる。それが竹のように伸びれば柱。つまりは[炎の柱]だ。これらの事から、ユダヤ人が日本の文化に溶け込んでく過程において、神山文字ができ日本語の一部になっていった。逆に言えば、それは日本人のルーツがユダヤにある事を、紛れもない事実として物語っているように思われる。残されたこの言葉には、秘宝の場所を解き明かす手がかりにもなってるって解釈(かいしゃく)になるな。」

「それはどういう意味？」

「お前がその場所に行けば判るってことさ。お前に刻まれたメノラーの印が、探知機の役目を果たしているってワケだ。一つ一つ段階を踏んで探して行かないと、一足跳びには行かないだろうがな。あっちをしてみろ！」

秀樹が眉山の麓(ふもと)を指さしたので、はるかがそちらを見てみると。

「あっ！炎の柱...!？」

天神社(てんじんじゃ)の辺りが竹やぶ焼けた状態になっていた。

「行くぞ。」

「うん。」

～後編へ続く～

バトルボーラーはるか

第一集

バトルボール(神気珠玉)

第5章

鍵(前編)

<http://p.booklog.jp/book/56824>

著者：Ψ (Eternity Flame) 英 樹 (はなぶさ いつき)

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/eternal-spirit/profile>

ブログ：<http://profile.ameba.jp/jjmmd123/>

編集：Ψ (Eternity Flame) 秋乃空 (あきのそら)

ブログ：<http://profile.ameba.jp/battleballer-haruka/>

感想はこちらのコメントか秋乃空のブログへお願いします。

<http://p.booklog.jp/book/56824>

お気軽にアクセスして下さい^ω^

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/56824>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ